

京都精華短期大学

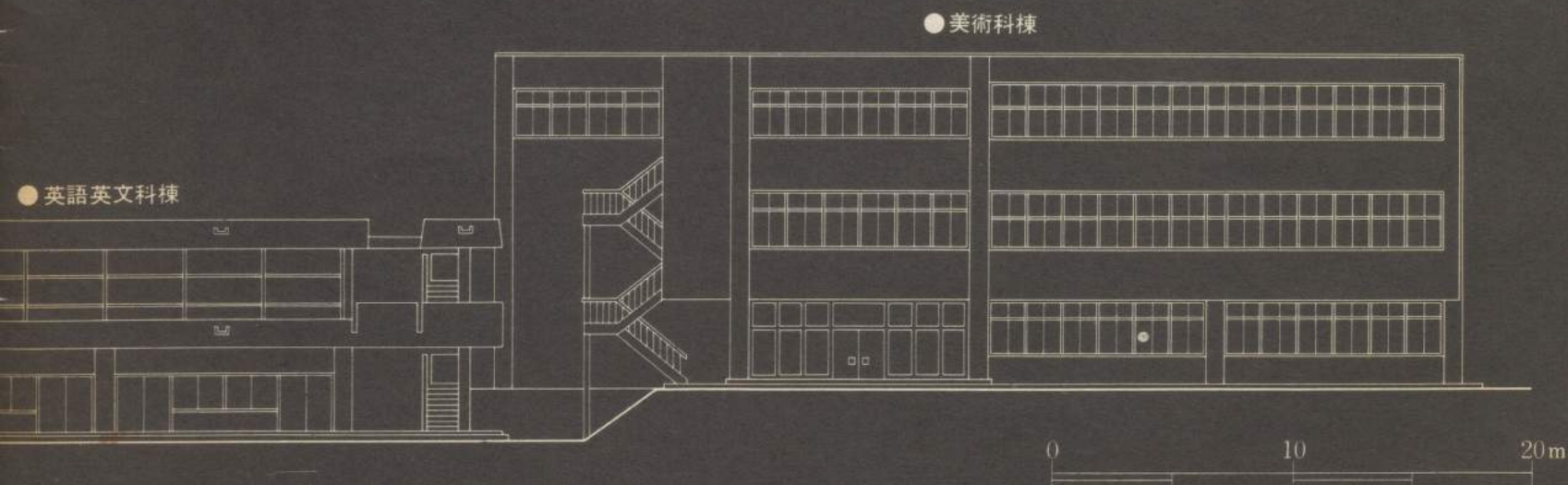
THE KYOTO SEIKA JUNIOR COLLEGE

男女共学

禁
帯
出

1970年 学園案内

南面図





われわれの大学は、来たる3月、はじめての卒業生を世に送り出す。この200名の第1回生は、いま将来のコースを決めるのに多忙である。ここに残って研究をつづけたいと思う者、就職を考えて毎日のように就職部へ相談にくる者、また、別に専攻を求めて他の4年制大学への編入を考えている者、あるいは、外国の大学へ行きたいと思っている者、さまざまである。

これらの諸君が、'68年の4月、はじめて、この学園にきたとき、その表情は、いささか堅かった。われわれの大学が、建学の精神としている「自由自治」ということの、ほんとの意味は何なのか、大学におけるデモクラシーは、いかにして可能なのか。このような問題について、考え、迷っているように見えた。

それは言葉ではわかっている、日常の大学生活を通して、それらを肌で感ずることが、まだできなかったからである。それは私ども教職員にとっても、また同じであった。どんな大学を創造していけばよいのか。自由自治の理念が、ほんとに生きている学園の現実とは、一体どういうものであるのか。まったく手探りで、それを発見していかなければならなかった。日本のどこにも、そのような大学は存在していなかったからである。

この同じ課題を持って、学生と教職員とは一つになって、それこそ馬車ウマのように、新しい大学の創造に当たってきた。この間に、もちろん人間のことだから、意見が喰いちがう場合もあった。しかし、それがどうにもならない感情の対立にまで、悲劇化したことは、ただの一度もなかった。それはデモクラシーの精神と制度とが、ようやく根づいてきた証拠であるとも考えられた。民主主義は相互信頼の上に成り立ち、さらに相互信頼を発展させるものであるからだ。

秋、10月、200の学生と30数名の教職員とは、一つになってこの山麓の学舎で「大学祭」を祝った。それはまさに「信愛」の爆発とでもいべきものであった。そして「こんにちは」「さようなら」「お元気ですか」深いいたわりをこめて挨拶し合うようになった。山の緑の風が、学園を吹きぬけていくときの爽やかさを、みんな感じた。

この新しい学年の4月4日、どこの大学もまだ眠っているときに、われわれの大学は、去年と同じく、近くの「京都国際会議場」で入学式をあげた。

在校生と300名の新入生と、そして、その父兄たちとは、いっしょにベートーヴェンの“歓びの歌”を合唱した。京都の新聞は、ほとんど半頁を費して、ユニークな入学式だったと書いた。UHFテレビもその模様を報じた。もちろん、われわれは奇を好んだわけではない。ただ大学創造の新しい仲間を迎える歓びを表わしたいと思っただけである。

この新しく入学した学生たちの、表情の堅さが消えるには、ほとんど日がかからなかった。第1回生が3ヶ月かかったものを1ヶ月で得た感じであった。解放された精神は、物事にこだわらず、そして正しいことを見つけ出すのに鋭敏に動く心である。平和の問題について、大学紛争について、また「大学法案」に対して、この大学の学生たちの反応の仕方は、適切で強いものがあった。それは絶望的な抵抗でもなければ、また傍観者的でもなかった。

社会に正しさを求めることと、自分自身の改革と、大学の創造との三つのことを、一つにとらえた行動であった。

こうして私どもは、学生たちの精神の成長と、この大学の発展とを、ようやく確信することができるようになった。

われわれの大学は、京都の北郊の、みどりの山の間にある。500名の学生と、34名の専任教員と、12名の職員とが構成している2年制大学である。

それは、やがて4年制大学になろうとしているが、しかし、4年を2年間に凝集・充実した大学生活の確立を期待しつつ、自由な空気の中かで、厳しい鍛練を行なっている大学である。そして70年4月からは、大学院に似た構想の専攻科（4年制大学の卒業生をも対象とする）を開設することを検討している。

私は、いま進学を志している諸君が、このような新しい大学がここに存在することを、記憶にとどめられるよう希望する。（'69.7.）

学長 岡本清一

THE GREAT SUN IS SHINING BRIGHT

The great sun is shining bright

Up in the boundless blue skies

And the gentle moon is beaming clear

Over the waving hills.

I hear a wind rising

Among the pines soughing,

And we are all gathered here

Upholding our Lofty Aim.

Noble Freedom and Autonomy fine

Are the goals we look up to

And we are the builders of our Seika

Firmly united one and all !

WRITTEN BY H. YANAGISHIMA

